

山茶花 真城 蘭郷

あまた散り山茶花日和なる一と日
山茶花のひしめく蕾抱きて咲く
山茶花の掃けば又散る朝の庭
山茶花のひねもす散りて円座なす
山茶花の紅白の散る四つ目垣

こぼれ萩 小島 小汀

秋高し病院までの試歩の道
冬日濃く狭庭の花に蝶去らず
細道の通りすがりのこぼれ萩
野の色を引きしめてみし吾亦紅われもこう
幹太く皇帝ダリヤ空に映ゆ

凍星 早村 春鶴

凍星や車も音も途絶へたる
来年の分もメモして古暦
稽古場が料亭となる年忘れ
くじ引いて席定まりぬ年忘れ
じぐざぐに林道見へて冬の山

去年今年 一谷 春窓

忘年会何処に傘を置いて来し
吾の進む道を恵方と思い切る
手を引いた娘の運転で初詣
健康の話の尽きず初電車
老いの春些細なことに拘らず

乳 鋏 東 素子

冬冷えの乳鋏ふとし長屋門
乳鋏に遊ぶ冬蝶長屋門
乳鋏の長屋門撮り冬日果つ
採りたての蕪道脇に並べ売る
土つけて虫食い葉よし蕪土産

天草の里 武部 春浦

柿の木の下で柿食う山の人
ゆく秋や見上ぐる猫の眼澄む
泥落とし真白き大根風呂吹きに
寺のつわ百姓一揆の先祖見し
快鳥の鳴き声ひとつ時雨川

落柿舎 白原 博泉

落柿舎に冬の音聴くししおどし
落柿舎の柿の重さを仰ぎ見る
簀笠や去来訪ねて冬浅し
笹鳴きや句箱古びし去来庵
遊船の行き交う川や紅葉狩

大鳥居 久保 春玉

冬曇り四天王寺の大鳥居
もういいかい、まあだだよとや日短か
憂き事は吹っ飛ばしてや年の市
箒目の美しければ掃く落葉
短日や電話の受信音高し

パリの旅 山本 春英

葛紅葉日記にしおりパリの旅
凜とした朝の気の満つ冬木立
シヤリシヤリと大根うましダイエツト
ままごとの始まる車庫や冬日和
出直して着替えに戻る寒さかな

春 灯 田中由つこ

教会の壁の乳色春灯
何を食べやろ寒晴れの日曜日
赤のまま鶴に折らるる葉包紙
洗面所磨きに磨く風信子
探偵に転職しようか地虫出ず

古暦 真城 蘭郷

捨てられぬメモまだ多き古暦
句を書きし余白の汚れ古暦
親のメモ子のメモ大事古暦
句会終へみちぐさせぬも師走なる
師の句碑を訪ね笹鳴しばし聞く

初雪 小島 小汀

初雪の窓に映りて静かなり
初雪の心おだやかなりしこと
冬草の野に大普請始まりぬ
柳散る川面の流れ眺めつつ
雲払い空深くして冬の月

雪国 早村 春鶴

成人の日とて振袖しらずと
雪はらふ孟宗竹のゆれ大き
雲も凍て地も凍て山里鎮もれり
中夫の月冴えわたり雲動く
雪国を逃れ初旅浪速路へ

お正月 一谷 春窓

真ん中に座らせられて初写真
深々とお辞儀してをり初電話
「運」といふ字を掛けかえる今年かな
息白く平穏な日を祈りけり
梅開く頃とつぶやく独りかな

初詣 東 素子

満天の星を抱きて初詣
初詣ア・ウンの二王我を見る
注連飾り揺る、風あり初詣
柏手の響き還りて初詣
御神酒受け六根清浄初詣

冬景色 武部 春浦

一筋の野菜枯野の片隅に
わらべ唄口ついて出る冬景色
大大根料理つづきて寒の内
夜更かして初湯となりし二日かな
暖かし足元に猫丸くなり

初詣 白原 博泉

玉砂利に足取られ来し初詣
初みくじ一本の矢を解き放つ
元朝に見知らぬ鳥の来てをりぬ
二日晴れて門前町のまねき猫
踏切の傍を流る、冬の川

初夢 久保 春玉

初夢や駿馬駆けくる夢を見し
仏前にまずお雑煮を供へけり
独り居の豆腐鍋して寒に入る
寒きびし膝を撫ぜつ、電車待つ
鉛筆の芯を削りて塾始め

銀座の春 山本 春英

初旅や銀座書展の西東
墨ひかる銀座新春書展かな
初春のネオンのソフトなる銀座
家族みな「吉」ばかりなり初みくじ
籠りつ、ハモル親子の初湯かな

雑詠 田中由つこ

思い出に冷めてしまへりさくらの湯
墓地は更地に桜薬降り積もり
優曇華や皮算用の途方もなし
姫胡桃耳打ちされて耳痒し
サフランの乾ききつたり揉みしだく

歳月 佐藤 雲溪

賀状書く師の面影を偲びつ、
孫帰ると聞いていそいそ年用意
落日燃ゆカラスの騒ぐ冬至の日
豆腐鍋静かにつつく老の春
連れ添ふてここまで来たりお元日

冬桜 真城 蘭郷

つつましく咲くが風情の冬桜
大寺の一坊寂びて冬桜
近寄れば以外に疎なり冬桜
溜飲を下げるごと飲む寒の水
祈りもて汲む一杓の寒の水

冬晴れ 小島 小汀

初詣一社につづき二社三社
冬晴れの空にくっきり二上山
雲去りて大冬晴れの広がりし
紅梅に山風ひそと渡りけり
朝食の湯気に包まれ寒卵

立春 早村 春鶴

雲間より光一条春立ちぬ
立春といへども空は重き雲
立春に菜園荒しの野猿群
園長が鬼とは知らず年の豆
年の数だけは食べたし年の豆

初硯 一谷 春窓

雪籠り息緩やかにいろはの「い」
神の恋氷湖に秘めし朝霞
笑ふ山舐めては煙みんなみへ
小さき息窓を溶かせば凍ての月
我慢することも覚へて卒園児

春の雪 東 素子

立春やふうわり雪の薄化粧
音収むただしんしんと春大雪
春の雪足跡深きしづけさや
露のたう深々重き雪の中
ひのもとに余震残しつ春の雪

色即是空 武部 春浦

風邪熱に「色即是空」黙している
風邪ひきて鳥の影さえ疎ましや
音たてて身頃の梅に降る氷雨
逃げられず逃げる気もなし冬の蠅
しぐれ雲通り過ぎるを待つており

日脚伸ぶ 白原 博泉

都鳥蕪村の淀で遊びをり
石仏の深きまなざし日脚伸ぶ
春待たず逝きし妹一周忌
蒸気噴く圧力鍋や春近し
白梅や月夜に咲きし母の家

豆まき 久保 春玉

大寒やセーターのほつれつづくりし
丸かじり寿司は恵方を向いて食べ
豆まいて鬼追い出して一人かな
冬將軍亀のごとくに首すくめ
手袋を脱げば墨つく指の先

山茶花 山本 春英

山茶花を目印にして人を待つ
塾の灯の向こうに見えて寒の星
如月の病棟カーテン皆閉ざし
笑みこぼしイヤリング揺れ新成人
太陽を真向かいに帰路日脚伸ぶ

針山 田中由つこ

少し丸くなりし気にして四月馬鹿
春暑し避難ロープの在り所
針山の針を楽しむ春の果
昭和の日組立自転車の水色
ラ・フランスの横に置かるる丸眼鏡

梅林 真城 蘭郷

紅白の梅の遅速は言ひ難し
梅古木先ず幹を愛で花を愛づ
梅林に香の吹き溜まりありにけり
日本語の豊かさ思ひつつ梅見
園広き中にふる里豊後梅

梅の花 小島 小汀

下萌や子馬とあそぶ実習生
凍星と一線太し飛行雲
紀州路の梅林はるか海青し
風に音生まれて窓の春の雪
梅林の木々低くして空青し

春霖 早村 春鶴

春霖の止むを待たずに出かけけり
夕東風に向ひて家路脚重し
夕方の雨はいつしか春の雪
頭から浴びし春泥下校の児
今日のような日もあり重宝春炬燵

信濃早春 一谷 春窓

たうたうと坂流れゆく雪解水
ひと種類減りし葉や小鳥鳴く
対岸の街の灯多し春の湖
表札に加ふ孫の名梅日和
春うらら言ひかけしこと忘れたり

梅便り 東 素子

「普通」てふ言葉悲しき春浅し
何度目の寒の戻りや春野菜
指に滲む香や朝摘みの露の臺
震災忌三歳を迎え梅日和
簡潔な添え書きのあり梅便り

梅の雨 武部 春浦

冬空にジャンプのスキー風に乗り
余寒とは凍ぶり返す言葉とも
梅見客八幡宮の雨静か
豪邸の庭の広さや寒椿
まだ残る風のウィルス梅の雨

春近し 白原 博泉

花いちご子ども頃の頃に戻りたし
小綬鶏の鳴いて山墓静まりぬ
白黒の家族写真や土筆摘む
弾き語りギターの音色春近し
メロディーを奏でる如くチューリップ

春炬燵 久保 春玉

ばら寿司の酔に酔いそうな雛の間
夢で会ふ亡夫やさしや白椿
法話聞く彼岸の寺の昼下がり
ぶり返す春の大雪見て炬燵
本を読むひとりの時間春炬燵

春を待つ 山本 春英

本物の鶯かとも山の宿
草の芽や歩道の脇の割れ目より
大試験終わって梅見誘われし
山鳥の鳴き声きびし春を待つ
これからは書く楽しみや水ぬるむ

田中つこ

声だけは覚えてをりぬ巴旦杏

この句は、人間が本来持っている記憶力を言っている。そう言えば、人は最期を迎える間際でさえ、その耳にはいろいろの音が聞こえてくるそうだ。甘酸っぱい異端な味の巴旦杏と「声」の取り合わせが面白く、味わいが深い。

(守屋明俊評)

さくら

真城 蘭郷

いささかの奢りありけり初ざくら
昂りを押さへて仰ぐ初ざくら
初花に会ひ得て更に明日を待つ
万蕾を従へ一枝初桜
水漬くほど垂れて疏水の桜どき

松の花

小島 小汀

青空に真つすぐのびて松の花
山吹の花の黄明り目指しけり
老木の枝はり広げ柿若葉
小買物かならず持ちし春日傘
橋二つ渡りて我が家草若葉

花

早村 春鶴

開け放つ城門の中花の径
花冷えや場所取り合戦陣を張る
新しき仲間も集ふ花の宴
篝火のうしろは暗闇落花舞ふ
旧交を温め語らふ花の街

旅立ち

一谷 春窓

入学児兄着し服と胸を張る
彼岸会や子等には子等の話題あり
仏生会夫に供へしコップ酒
歩を進む無言の列や寺若葉
春の駅旅立ちの子は振り向かず

柿若葉

東 素子

掌をひろげ子等も舞ひをり花吹雪
散り敷ける花の明りを掃き清め
葉桜のそよぎし風をかんばせに
日々に色変えて柿の芽柿若葉
幾たびの転居に着きて春の蘭

おぼろ月

武部 春浦

咲きほこる背中合わせの椿かな
きらめきや芝に沁みゆく春の水
ナイターのライトの上のおぼろ月
駆け廻る名所の花見疲れかな
啓蟄や姿まだ見ぬ蛇の穴

花

白原 博泉

校庭の隅に花満ち空真青
青柳や小川の風の生まれ来る
店を出て梅田の街の花菜雨
夕桜天満の駅にさしかかり
桜草廻り道して花ざかり

春シヨール

久保 春玉

ままごとをする子しない子花ぐもり
ランドセルの光るを背おい入学児
何気なき春のシヨールに若やぎて
瀬音してボンボリ並ぶ賀茂堤
春衣着たる想いで眺めおり

雁帰る

山本 春英

夜桜やギター聞こえて来る花見
花を見る人見て笑顔老夫婦
群れよりは遅れし一羽雁帰る
羽根あればついて行きたし雁帰る
書を楽しむなんてまだまだ春の雨

牡丹 真城 蘭郷

白牡丹日和の続く愉悅あり
白牡丹と云へど朝夕違ふ白
牡丹の静謐に触れ刻忘る
牡丹の華やぎの刻とどめたく
ぼうたんの明日なき命惜しむ雨

五月晴れ 小島 小汀

干物の乾ききつたる初夏の風
小雀の二羽降りたちし草若葉
高校生葉桜の道登下校
霞みつつ遠連山の窓辺かな
草引いて狭庭明るき五月晴

鯉 帆 早村 春鶴

産着干す横に小さき鯉帆
風止んで大口空へ鯉帆
ペランダに園児手づくり鯉帆
上流に頭一線鯉帆
一輪目咲いたと便り牡丹園

信州の春 一谷 春窓

雪残る畑に耕人光浴び
娘の家に越しゆく友や桜散る
立ち話一人加はり花日和
蒲公英の黄を敷き詰めて無人駅
花買いに^{たんぼ}出て初蝶と擦れ違ふ

竹林の宴 東 素子

竹林へ鶯の鳴く道つづく
うぐひすが鳴く竹林の宴かな
竹林の宴楽しみ春惜しむ
アコーデオンの五月の竹と響き合ふ
竹爆せて焼筍の酒に酔ふ

さえずり 武部 春浦

潮騒いや耳を澄ませばさえずれる
嫁姑泣いているよな緑かけ
ブランコの親子揃って空を見る
緑陰の木洩れ日そよぐ日なりけり

つばくろ 白原 博泉

つばくろや物産展の旗かすめ
パンジーの色それぞれに咲き誇る
風ぐるま母は眠りしこと多く
庭石を濡らして去りし春の雨
紙風船息を吹き込み仕上がりぬ

花は葉に 山本 春英

春の雲うしろに飛んで飛機降下
大筆の揺れて間もなく春時雨
ママ集ふ葉桜の道たもとほる
はたはたと新茶ののぼる道の駅
花は葉に小さな村の暮れ急ぐ

母の日 久保 春玉

元気かと「母の日メール」届きけり
カーネーション一輪届きそれつきり
矢印に沿うて見学つつじ園
子供にも言えぬ憂きこと鉄線花
一周忌迎えし五月母恋し

梅雨の晴れ 小島 小汀

夕暮れの風新しき梅雨の晴れ

梅雨晴れの心はなやぐ赤き花

赤信号渡れば青葉並木かな

青葉道都会の空の広告塔

空梅雨のようやく雨の日暮れ来し

梅雨晴 早村 春鶴

梅雨晴や受賞の旅にまぶしくて

梅雨晴に安芸の書展の華やけり

梅雨晴やたゞ碧き安芸の海

十葉や小さき祠の傾きて

木洩れ日に著我の白さの際だてり

孫の夏風邪 一谷 春窓

看板の無き豆腐屋の夏の朝

紫木蓮散りて地の色空の色

日の落ちてしばし燃ゆ雲蛙の音^ね

夏風邪の孫預けられ鶴を折る

静けさや白扇に筆入れる前

青嵐 東 素子

面^{メン}の声気合鋭し青嵐

躍動の竹刀の響き青嵐

あお嵐鷺みどりに赤レンガ

青梅雨に集ひて心ほぐれけり

時を越へ童になれり青き梅雨

衣替え 武部 春浦

半分は衣替えたり野良仕事

猫の爪切らせてくれず夏毛舞う

山の端をほたる飛び交う山暗し

幼き日螢は星の如く飛び

赤ん坊泣く風鈴の風乗せて

能登の旅 白原 博泉

土間抜けて蝶飛びゆけり時^{とき}国家^{くにけ}

夕暮れになびく青田の水光る

タイヤ痕つづく千里浜春の風

朝食は個室になりし海の宿

朝市で能登の塩買ひ春日和

梅雨の朝 山本 春英

悠々とお馬の雲や梅雨晴れ間

梅雨晴れて早朝体操始まりぬ

干草の色の変りて量低し

てのひらに残る香りや夏蓬

老鶯もついでにばみに来る老樹かな

梅雨晴間 久保 春玉

書を習うこと一ト区切り梅雨晴れ間

垣根よりはみだし咲くや額の花

紫陽花の雨をめでいる女傘

捨つべきもの捨てざりし梅雨寒し

うす陽射す水槽ひとつ目高浮く

雷雨 早村 春鶴

谷川の水濁らせて雷雨去る
田水の水のおふれて雷雨去る
降り止まぬ大夕立の空仰ぐ
休耕の田にもいつしか合歡の花
年の差をなくす温泉浴衣かな

夏の月 一谷 春窓

着流しの外人力士夏の月
渦巻きの蚊取り線香子等ねむる
農道は一直線や虹消ゆる
夏蕎麦の花踊らせて雨来たり
投網打つ水面に崩る夏の月

烏と枇杷 東 素子

熟れし枇杷啄み散らす烏かな
車道脇に動じぬ烏枇杷くわえ
枇杷くわえ烏翔びたつ羽音かな
枇杷豊穰しばし烏の宴かな

蝉しぐれ 武部 春浦

蕪切ればミルク流る、白さかな
泰山木切られても尚花咲けり
梅漬けて今年も悔いの反省会
葉をゆらし猫の目ゆらし半夏雨
夢うつ、ぱたりと止みし蝉しぐれ

夏帽 白原 博泉

蓮の花茎長くして花ざかり
夏帽を深く被りて若々し
片陰やジャングルジムに二・三人
螢とび母の記憶は夢の中
撫子を愛でて母校を懐しむ

星まつり 山本 春英

母と娘に七夕の夜の別れかな
星まつり母に別れの化粧して
母と娘の無言の別れ星まつる
抱きついて母と別れの星まつる
落柿舎の門前広し麦の秋

捨て苗 久保 春玉

捨て苗は田んぼの隅にかため置く
頭に觸れて今日も晴天夏のれん
おしゃべりをして七夕のミニトマト
FAXで七月俳句送りけり
サックスを吹く少年とリラの花

青嵐 田中由つこ

青嵐手に重たきはゲバラ伝
三年目日記中段に記す梅雨の明け
火曜日に行くべきところ朝曇
夕焼けに向かひて一万歩超え
日盛りや下段の構え隙の無し

大花火 小島 小汀

登校の女子学生や今朝の秋
娘を送りしばしたたずむ天の川
すつきりと座しまだ若き盆の僧
終末を見せる連発大花火
帰省子の去りて三日となりけり

星月夜 早村 春鶴

廃屋の庭に咲き増へ赤のま、
園児達願いの糸に手間どりて
初秋や軽き病に打ち勝ちて
掃苔や天明の文字かすかなる
夜気にふと草木の匂ひ星月夜

蛍草 一谷 春窓

夜は夜の水の匂ひや蛍草
風鈴のか弱き風を拾ひけり
夏休み婆の出番の予定表
白墨の手を拭く前に拭ふ汗
音立てて水飲む子等や茄子の花

夏の夕日 東 素子

炎暑今収める如し夏陽落つ
二人して夏の落日見てをりぬ
夏入り陽燃えつゝ落ちし夕べかな
滴りや共に老境夫と居り
台風過風につゝまれ蝉時雨

アイスコーヒー 武部 春浦

帰省子と話の尽きず盆休み
捨て犬の顔思い出す梅雨暗し
全身を絞るふるわせ蝉の声
庭仕事アイスコーヒータイムあり
定まらぬ晴雨に帰省盆おどり

月見草 白原 博泉

月見草雲の出て来し風の道
通学路咲いたダリアの白と赤
睡蓮や又ひとり来て立ち止まる
射干の花咲き暑さ真つ盛り
夏の蝶ゆるやかに来て飛びゆけり

風鈴 久保 春玉

髪切つて天神祭と川風と
マネキンの水着水玉青と白
睡魔いま誘いに来たり軒風鈴
つつがなく今日の収めの冷奴
取りあえず仏に供え初の桃

百日紅 山本 春英

思い出に残りし庭の百日紅
母の教え守る約束夏の雨
しかと幹抱いて動かず蝉生まる
法事ごと全ととのい天の川
書に精進すると決めたり大文字

蝉時雨 佐藤 雲溪

逝きし彼いまどのあたり天の川
物言わぬ人に一輪梅雨の花
度忘れの度重なりて蝉時雨
耳鳴りか蝉時雨かと老の耳
独り言自分で聞きて蝉の声

虫の声 小島 小汀

ひそやかに小川のほとり虫の声

仲秋の月光浴びていて独り

生垣いけがきのとぎれしところ萩白し

立話短日ははや暮れてきし

雲払いとつぷり昏れし大月夜

九月来る 早村 春鶴

何事もなき二百十日の旅の空

風にゆれゆれ動いてこそ秋の草

山の端を離れ名月里照らす

宿題を今から書く児九月来る

園児等の白き歯見せて九月来る

秋の灯 一谷 春窓

秋の灯に馴染む虫の音ひとり酒

しなやかに猫通り過ぐ良夜かな

山葡萄一人の幅の径続く

荷を提げてつまづかぬやう十三夜

何気無き言の葉ひとつ身に沁みて

市樹の黒松 東 素子

松手入れしている音や秋高し

市川の「市樹」の黒松天高し

黒松に添ふて塀切り秋日濃し

百年の松の由来や苑の秋

百年の年輪秘めて松の秋

花火 武部 春浦

思い思いの顔を照らして花火の夜

ともかくも準備しており夏祭

夕立やみ鳩のどで鳴くころころと

親知らず抜けてお盆の仏壇へ

蛸ひぐしや夕陽落ちゆく木下闇

蟻の道 白原 博泉

分校の雲はゆたかに蟻の道

夏の月廻り道して気付くこと

母老ひて今もゆかしき夏暖簾

雨音の強くなり来し昼寝かな

父恋ひし草笛高く吹きをれば

夏行 久保 春玉

「夏行」として夏講習に對しけり

かなかなの声に暮れゆく高野山

すべきこと山ほどもあり秋の風

風の音は女人高野の萩の花

夏の疲れとれよと熱き吉野葛

新生活へ 山本 春英

午年は白光名月宇宙海

とまり木を求めてひらり秋の蝶

丸字染めの新たな家族秋のれん

工事機の雲突き破る天高し

親の居ぬ孫の涙や秋深し

高野山 井上 元良

鬼やんまギョロリ目玉に威勢あり

勤行に我も身を置く萩の朝

涼風の高野山にて学書会

高野へと下界を離れ盆修業

高野山軒店どこも盆華売る

今年米 早村 春鶴

掌にとれば青きも交じる今年米
秋の田のこの色までに育ちけり
碧空の透けて見えきし松手入
新聞の来し音聞くも肌寒し
林道の地道となりて木の実降る

信州の秋 一谷 春窓

秋の雨鎮めて大鼓打ちならず
大根掛け伊那谷へ道聞かれけり
庭紅葉遠き昔のラブレター
かもしかに出くわす意外茸狩り
生い立ちを語り明かしつ根深汁

露 草 東 素子

翡翠色跳ねてキチキチバツタかな
行く秋を惜しむしじまや虫の声
郡生のフジバカマ咲き香の幽か
露草の露の一滴瑠璃さやか
秋没り陽晩秋の絵の中に居る

秋深し 武部 春浦

三角の目をして野良や彼岸の日
台風を押しやりて秋深みけり
しめ縄を燃る掌の厚さかな
秋天の奥の奥には嵐の日
鳥の影頭上掠める秋深し

姫路城 白原 博泉

門入りて朝顔の藍咲きそめし
秋の蚊を追ふて再び見失う
コスモスや改築なりし姫路城
書写山に上れば秋の気配かな
吾亦紅もつれてからむ武家屋敷

天高し 久保 春玉

天高しくくるくる廻し秋日傘
空高しドラえもん達が飛びそくな
ほんやりと窓の灯やちちる虫
おにぎりの手についてきた今年米
胃カメラを飲むというだけ秋深し

パトカー 山本 春英

売れ残るコスモスなれど凜として
追い炊きの湯にひたりて秋の夜
孫宣誓天までとどけ運動会
台風雲の流れにクロスあり
秋風や信号無視とパトカーと

運動会 井上 元良

組体操乗りて乗られて天高し
車いす押されて駆ける運動会
笛大鼓獅子練り歩く里祭
秋天へからくり人形飛びあがる
秋声に心静まる墨書かな

冬耕 早村 春鶴

冬耕の後を追いたる鳥二羽
冬耕のエンジン音の途絶へがち
街灯の消へ残りたる冬の朝
亥の子餅二度ももらひて今日と知り
神棚へ供へ忘れし亥の子餅

もみじ狩り 小島 小汀

はからずも山雨の深き紅葉狩り
雲海の広がるびわ湖秋深し
秋晴れて姿清しきびわ湖富士
たかき樹や地を這うもあり山紅葉
山紅葉ヘッドライトに浮かびけり

濃紅葉 一谷 春窓

濃紅葉の揺る、川面や散歩道
たもとほる名残り紅葉の風に耐え
川面の緋ひとところ濃し冬日向
出掛けると決めて紅差し初コート
鶴首のような瓶あり冬椿

温め酒 東 素子

山茶花の咲きこぼれ初む冬仕度
墨用ふ道の展開冬に入る
友の琵琶天地つつみし小春風
小春風煌めくひびき薩摩琵琶
温め酒夫と交して年惜しむ

秋祭 武部 春浦

秋太鼓遠く近くに響きあう
ギシギシと鳴る祭竿秋時雨
秋時雨祭太鼓のをちここに
眼鏡拭き目を細め読む秋灯下
銀杏燃えて黄をまき散らし天高し

秋扇 白原 博泉

よく眠る母を見舞ひて秋扇
秋高し由緒確かな異人墓地
コアラ舎の外は激しき雨の秋
さっぱり浪速に生きて秋桜
行く秋に噴煙上がる桜島

筆の先 久保 春玉

コスモスの咲く日だまりや般若寺
ルノアールの絵を見て京の日短か
山茶花の散り敷く苑の小道暮れ
時雨る、や思ひを托す筆の先
切干の煮ゆる香りに書く便り

明日香風 山本 春英

明日香風書人ばかりの秋館
コスモスの大きく揺れてバス走る
秋深し半袖好む子等元気
増えてゆく灯りや明日香里の秋
パーティーは紅葉柿の葉寿司よろし

秋深し 井上 元良

活動展瞳輝く芸の秋
人前で清書運筆学ぶ秋
拝みある九体阿弥陀や秋深し
小鳥来て太子の御廟賑はいし
肌寒もおしゃべり五キ口浜辿る